浮世風呂

初編上ノ二

男湯

特別
へ13
3474
2

子ほちからさぞホイくお咳が出るネ。ネ悪いおとッさんだの。あんまりかしおき吉を洗ってくろう。腹の方へ灸があるから、ようはせろう。灸ゥ誰さるぞさ「妹 おッかア「金 すゥおッかアか。にくい母めだの。うまくきもて母ッかう可愛坊に灸ゥきえて「妹 おッかアうのゥ「金 ふく。母アるまくあて母ッかうぞ「兄 おとッさんモゥ出よう「金 まださく モット温て「兄 そ迄でもせん紙くの紙「金 十二おとなしく紙へ雀へ是ほどおとなしいのをサア兄さんも雀も奇をさうひな「兄 おゥ月さまハイくゥつゥ十三ぞろ「金 そうや「兄 まだ年ヨアけくなア「金 あの若

特
門 ベ 10
號 3424
卷 2
昭和二七年六月三十日購求

子をとらんで 兄「このこをとらんで 合「サア雀もとらひま 妹「おまへ
だつちよ 合「ヨウくおまんにだいてよ夫〳〵 合「サア夫〳〵 妹「太鼓
あつて 合「去くまごさお前どうけつさ 兄「油買に茶ア買に 合「アリヤ
兄さん上気ござよ 兄「油屋の縁で 妹「氷張て 合「ヨて氷が張つて
兄「さとべつてとヲろんでヱ 合「あアぶらう一升こぼがしてア 合「サア雀も
いひまその油どうちさト・すらひま 兄「次郎どんの犬と 兄「セアらく
おとろざん遠いさア・太郎どんぢめのを 合「こんな當て 妹「ちイまつて
おとろざんへ忘れまきのつ かし〳〵 兄「甚犬どうしてさ 合「ホウくそろぶく

妹「たいこ張て 兄「あつちら向ちやアドドドン 合「こつちらもドドドン 兄「さう
じやア私へこつちら向ちやアどてどん 合「ホイさうかアどん〳〵
どんよサアあがりましよ・ハイ出ましたの子どもく・おつかアが
待てゐるござらうぞ・お芋か・餅か・何でも能子にするさ御襃
美に待〳〵して居るござらうや・能子にするさぞ・アリヤ〳〵初が
お浴衣を持てお迎ひに来さぞ 妹「おちやめべで 合「ヨウく「サア
初や・あげるぞよ・マレ能子にするさぞ・（よりたまさん醫者どん きよとえ本をしてみる）「れ
隠居どうでござるもナ・相かはらず碁でござらう・伊勢

主人油八の太郎兵衛なる者。なのくれ出會ウナ。所謂碁
敵する者であらつて。（ハツハツト人をあざけるやうな笑ひそれさへ出て ハツハ切口上似ある者とふちちもあり）「イヱ
此頃ハ親類どもに病人がござつて家内の者が代アもぐふ夜
伽に参るの。イマ何のかのと取紛れて碁も出しませねて「へ
夫ハこちらへ。バテさて夫ハ氣の毒千万トキニ病体ハ「兎角食
物が納アま兼まして。食ると尾籠ながら吐まする。此節ハ
まさく重つてまさそうで「ハア誰におかけるさんさ
「仲景さまを三廻りで驗が見えませぬから。孫邈さまは
中ぶびお願申て。只今でハ丹溪さまでござりますと「何と見立
たナ「まんぐどなたのお見立も膈症じやと仰られますと「膈症で
なへナニ夫が膈症ながら物を食して吐をものハ膈といふハ俗物
も當推量にいふテナ。膈噎翻胃なる者ハなかく又大に異る
ものごて。何もしてくあの男等が小量で何がしれるものか（ハヽハヽ ハヽハ）
既に医書といふ内にも外臺千金方などの説さへあれば。そ何といふ
変があるて。エて何アノ何でごろつきて息ハ鵞棒に似て飛で散
乱し。人ハ膈症にして達て俳諧をとあるさべて病人の息ハ

鵞棒といふて。関羽張飛が持し棒を呑だやうなもので息がせつくといたしますものでござります。兎角飛で撒乱をしてこがる。此膈症なる者は。所謂俳諧ずきなどは好む人にある病ひとござりて。人は膈症にして違て俳諧を人が止ろくといふ程違て俳諧をする者などが生ずる病ぢて「するれどさやうおつきやれバ俳諧が好でこまりまする「イヤそれも一寸哥仙ぐらゐならよけれど五十員百員などくると留員で又業ななさそてそれは覧どろ俳諧が好ぢ見だとも其通ぢ見脉にして病を看を此方は聞さずして病を察さるのさ。ハツハツ。ハハハア去嫌がある食物をお氣にはけられては其膈噎翻胃に似て非なる者を鵜飼の症といふ是をねつち物を食てさぐに吐くものでを。おそらくは鵜飼の症でござらう。難治の症でござるとおの男等は匕先より口先が功者で。病家の俗物をとらくては新渡の唐本にには点がなくて読にくいは唐人もするぐる杜撰が多いなどといふ傍からモシ丹渓さる鶏卵を食ふとやまをいくぞ致しませうといはれてアア。なる程そ。鶏卵

みのうしくあへあつしたべらへと思ても。あひる卵をかへすが能いあ

どてんはの女する事をいふ男どもが。ハウハウハヽハ。歎しいるごてす。

ハウハウ。イマ。チトお出なさい此間ハ腰こをしふ鞠を物さてどんな所

謂蹴鞠するのの成通卿などの高手にもあれど踏つぶさ

まても大きく腰こをしふ能てナ。チトお出なさいドウダ番頭。所

謂主管する者も大役どてナ。ハウハウハヽハ「アヽ今日ハどちらへ「いや

今日ハ芥子園が書画會から顧炎武が所へよつて山谷ろ

詩會へとるが東坡や放翁ろ代作をたのむ事ざらう。兎角

隙ほぶしが多くて病家の小言を聞てゐるね。是で医者が

流行てハたまらぬ。イヤ左らバ。ハッハウトハヽハ（ゆうさをうく て出てゆく）▲（八兵衛といふ男あたま からぷり〳〵とゆげを

たてゝもわくいきを下おびのうちへ としまいてきのをかふてみる）▲（松兵衛といふ男古風なふんどしのさがりをおどく をさんでおわてみるむ身ぬぐのへ丸くしておくさまのく）

（ちよいと のせ）「松「八兵衛さんアレ見なさい。深い笠をかぶつて。障子ひけ

さうな羽織を着てあるくにがくしいあれが三十箇所の

地主さんの男ざア「八「角のどうろう子「松「さうさ痛つしさもらさい

いばむ。むびげがころいと皆あの通アござ「八「ありやまあくよ。天王さん

ヘトいふ形ざ子「松「あの内親父ハ伊勢から出て来て一代に仕上

人さ。其代利勘ごあんでも人ハ奢てへゆかねへ。おらがふハ大公魚がアんまるから。チト驕つて奉公人ふ食わせうといふ所が。大きな皿ふ鯷の酢煎るか五疋ぐらゐ。尾頭をならべて鯷が小笠原流で。ドえらふかまへて居るわさ。これぢやアならふ買て焼て置て。自身ふあすの朝さげかごを提て河岸へ行きまア。河岸中をぶらぶく廻つても直が出来ねへから土大根の折を買て来て。ソレきのふの焼ざかなを一疋づゝ入れて。輪切大根の煮付。夫が惣菜。大勢下女ならべるがあつても。菜ハ婆さんが出てまんべんなく盛わさ。爺さんへ彼これをむつかしくとおさかりして女房がら魚といふものハ頭からまるがあるものだといふから。四五十人の手代子供が無拠首から食へ給べなせへね。ヱヽデ物が廢らね年中朝が茶粥で昼が汁ばかり。夜食ハ澤菴それも塩のあさ辛ハなぞから。二切で湯までの菜ふなるなふハ佛の日ごとに不断が八盃豆腐が平の中ぼゆらへ遊で居るサつさ。鰹節のだしる汁ハ恵比須講と生辰ぐらゐ。三度の飯の外ふ食ふものハ冷飯を干て糒の塩かり。

其中へ田舎から貰つた味噌豆をいれた所が。豆の數は鉦太鼓で探す程ぢやアねへ。其ノ豆よりの外は自作の醴と婆さまが上総産だらう。薩广だらうといふ茶の粉を捨るほどあり。其外に肴といふはさんぢよりなし。此先祖さまを大切にして出入の者に目をかけてやらしつたから。身体はよくなる筈。金が子を産で家賃が流込む。商では設かる。暫時の内に大造な物にならしつた「八 あるなど私等が親父の咄を聞にはまづ酒は恵比寿講だなりで。常に客のある時は蕎麦二ツ宛鼻の先へおいてサア〳〵お辞義なしにお上んなさいといふ所が。たつた二ツだから客も一ツ食つて立つ。そのあとで婆どのや。さあべ相伴しなさうとするともまあれと半分づゝ食とする。是丈じやア金もたまるはづさ「松 まづ其一貫利が能いからさ。僅三十年の間に。地面が三十二三箇所。土蔵が三十。穴藏が二十五六。出入の人數からかけては支も大造だそうさ「八 それなにたつた二三年で潰したさ「松 さうさ。なくさま早い物。一文の銭もあざなろそうなれ設かりませね。おまへがたも

お若いが銭へばかりひねくるゆゑ。金四計があくる。サア番頭。此番頭もだまりくしてゐて。モウ株でも買さらう番頭「ハイカぶへ汁の実に買ませうか。どうも銭金といふものはたまりませぬ松「イヤ〳〵至つて溜能のぐ心がけが悪いから溜らぬ。ありがたいとの御江戸に居て金のたまらぬ事があるものか。銭も金も一ツ所に集るありがたい所ぢやによつて。諸国の人が皆出て来て出世をするではないか。番頭も金を持たぬ氣なら國に居ておいて飯を食て冷くなつて居るぢやらうがナント。どうぢや一言もあるまい番頭「コレハあやまりました松「さうじや見所があるテ。此番頭へたのむ。綿の厚い着物が絹でも身へもたぬ。貴さまの着物も薄綿にあるではない。夫限ごと思つたらちやい八兵衛さんも今ではかくさん一人ぢやが随分孝行しなさい。世話をやかせなさるな。唐の何とかいふ唐人は寒の内に筍を掘らうとおつしやつた。金の釜を掘出しさとさへある八「ハイ私どもが孝行は金の釜も掘ねばなるまい。唐銅の釜を擔て来る。醴でも呑せるくらゐの事さ松「夫でも能のさ。今のどうぞそれ程な

身上を受取てあのざまハ不孝の罰だ。ナニが。親父の葬に。焼香をさせれバ。役者のまねをして上下でゐざりあるく。現在親の別ニ哀の情がつかえぬ奴だ。ろくでハあるまへとおもふと案のごとくだ。ヤレ藝者のソレちやいとめちのや何だへくどうとさあぐの者を内へ引込でどらぴくと騒ぐから茶屋だの女郎屋だのまそべろへところだりと内外の物入が強くある。仲間の取遣ハあがつくり大明神。に親父の身のごとくあくして志まつさ。そのくせ高慢ニ人を見くだして。文盲だの。ヤレ俗物とかゝう云て。茶磨藝を鼻ニかけたがる。茶坐敷だろうも何變捨さらをとねへさ。あれがあんの豊後よミの豊後志らずだとせうぜ。兎角人ハ身の用心く

ト いゝぞゆく

▲（田舎出の下男志らのうへおきを はつろけておまんじがけたまへをまて）

三助「モシ金を捨べへ云て。山吉ハ悪いるぞらし国サ居ると珍事でもある事が有けエ。爰でエ。何云だる己方で薯蕷と云まを「江戸でも山の芋さ

三助「モシ夫で其薯蕷めが。鰻なるさうだ「ハテ

三助「めんとも。ハア。五躰揃ってでも移へ。半分が薯蕷で。半分が鰻なるだア。そこでハア

猟師ハ夫見てうつたるげさだア。何でも山神どのゝ祟であろう。
蟒蛇どうぺい。蟒蛇の化物ハ不が魔性の物ニ違ねへ。余殺
さア手も付ねへ事だが。臨終しねへと聴きやア氣味悪いと。何が
ハア。村内お寄て評定のさ不がモノ。曾根村の松之丞殿
ちふ人ハ神功皇后さまの時分から代々續いた博識だア。七廿
開闢からの事を何でも志つて居ちふねへの人だアろう。
ハア松之丞どの鳫首のうち傾てまどイをくんて居つけエ。
アたまん者人考さア。是鰻ども鰻がまちがつて生神殿
ざわれて。代々住居のうしろ此村内ニ住者ハ法もあれ。薯蕷
が鰻ニなるこたな。モノ鰻が薯蕷ニなるこたな二ツ一ツの内ざア。
お祢宜どのゝ占も市女の察なさきまもらうねへ鰻ざア。
蟒蛇でエねへ。モノ夫ござけども。雀海中ニ入て蛤となるちふ
るさア書物ニもあるが。薯蕷が鰻化さるねへ庭訓の徃来
今川了俊其外雑書ニも年代記ニもえあるしねへ
るござと云けエ。何がハア。山師ちふ者ア。何耳ざアがな。早く
聞付るのんざア。叶るをがらまあ知て。直ハア熟談のうなさ

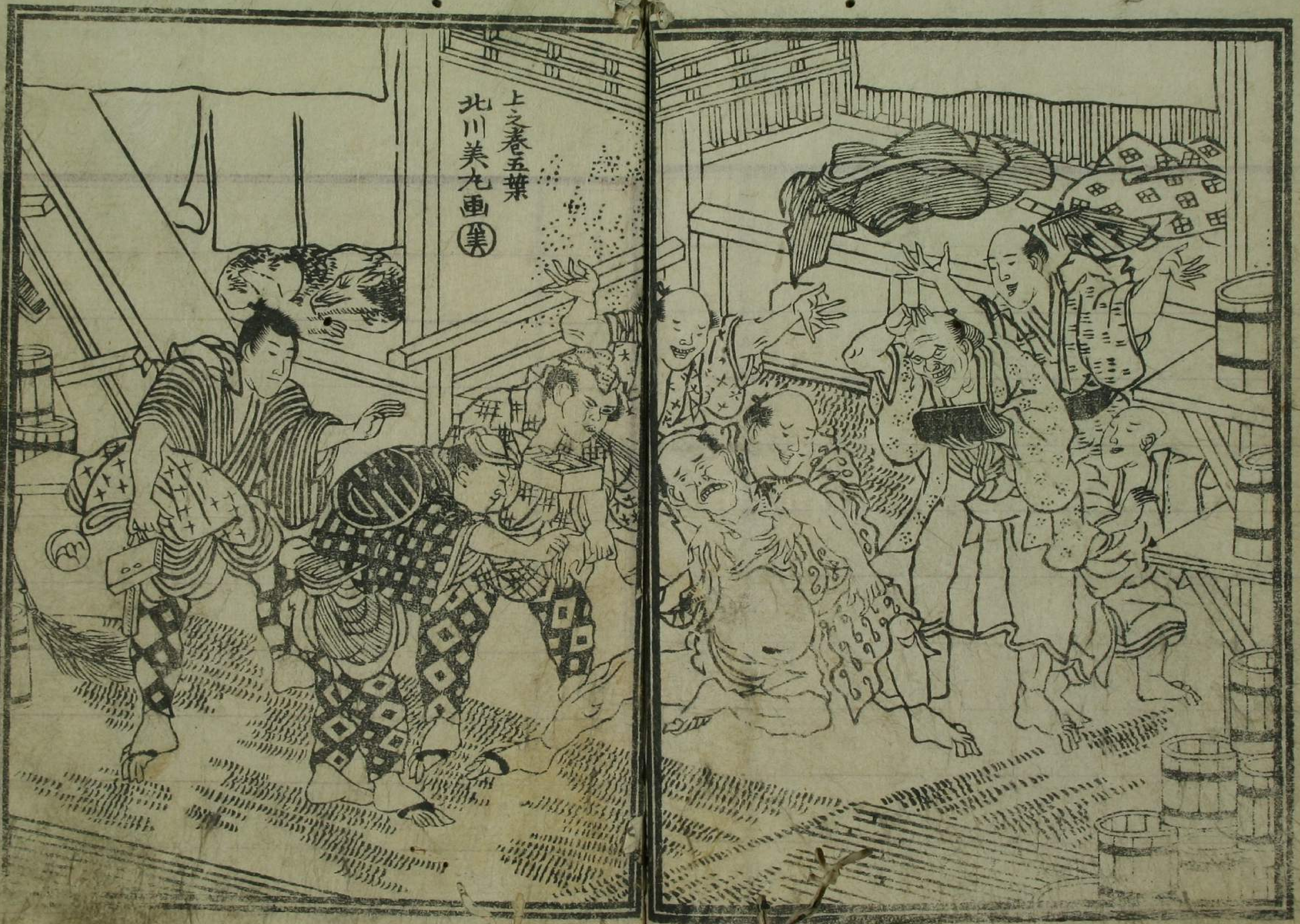
不ろが。小判二十両ぢァ。其廿両さ村内へ割付て。濁酒ぢァの。居びらき餅ぢァの。あんでもハァ三日正月で祝ッけェ扨その山師どのぢァ。何がそれや。今度観物の太夫どのさ云て。四角イ箱さ入て。開帳場の大金ゐろげべへとおもつておつたさ普請のうしてサア始べいとしるさ不ろが。サテむつかな支があるけんど「どうしてく「イヤハヤ腹筋よるるぞて。モノ半分鰻ぢとおもつさ薯蕷めが。普請中の日数さ経さ内に。薯蕷の形がめらちすくなつて。皆ハァ鰻になつてしまつさァ。半分薯蕷ぢ物が。からし鰻なつさりんぞくらおつちィねさらり。とつちィのさらり。抓べいとしても指の股さ。ぬるくぬるくかん出て。のろのろと鰻のおりイするぞァ。サア魂消めく死らがやうぢさにからはりんざうあつちねべェ。土埋さう鰻死て。半分でもあるべいが。薯蕷斗あつちやァ元直にするべく「アツハ〃〃〃トおおそ「何おしろかんじんの太夫殿の正躰がワりん役くろうるげさの何のぢやァ役人サア山師殿大きに目算違ぢ小屋掛から何から三十両斗損のして。

おけの先ハおいらて其鰻さ焼て食さげど一串の割付
三両二歩何〻とする髙い鰻ざア三十両の蒲焼一人で
食さア欲の皮が引張てさぞこんくさんべい（アノくくくく）▲（そりやあかうの串まで）
「湯氣ニ上つてさるざジイ番頭目を旦しと人があるぜエ湯
気ニ上つてさく「十三湯気ニ上つて夫ハ大変く ト（ゆかん大ぜいまてふろの）
（中よりろうぎんぐせんばいそんのよふく病人ゆげニあがつてたつひ）「誰ざく「よいくのぶさちさ「番人
のくせニ長湯をさるくぐ「手を吹かけろ「草履を
額へ載ろエ「十三そりやア顛癇ざア刀豆と肩へ書が能い

「それこそ早打肩ざア「ぶさ七マアノぶさ七マアイ ドドドン チヤンく
「おまへどんドマア格く呼生ろく ト（かみさんおきふさで大さわぎ 女房くぶさちから）
「どうぞぶさ七く氣がはいさかく「手へちつかりろ「ウ〻ウ〻〻
でく大丈夫ざく おくどうきささの「湯気ニ上つてさよ「ヱ〻
「湯気ニ上つてさよ「湯気湯気ニ上つてさぞ〻飛どるさの
家能く大丈夫ざく モウ湯気下つてさく夢中く夢中
ぶろけやツト湯気下つてさ大大く大丈夫ざく（ゆかくの男 ばんとうの）
（飯代アまニ来て盡ニ餅さと）

商人の諸声

「あやめあやめり「金時湯出香豆

上之巻五葉
北川美丸画
美

「豆腐ィ「蒲ァ焼は能かぞやれ「瀬戸物焼継ィかねはぎはござりませんか▲ヨイやれつきよ。おしやが不知の水瓶をたのミてへ。（やきつぎや）「ヘンやりまし

昼時の光景

（ふろの）中にて　トン〱トン〱うめねへ〱あついぞ〱「うめるまく水がなるぞ「湯が出るよ「ヨイ（トとお桶をめちらうう）▲（じいハ中さるがいするをとへて手拭をそそくぐ桶の[illegible]でうゐあめがゝ）コレ若イ衆ながしを能く洗らせへ。老人ハあぶねへさくべて

さうざけまくさ小桶をあつぐさるゝハ通をちがねへ。アレ水舟の水が濁るによ。誰だか糠袋をあけやあのざるゐ。ひげぞんざいな。コレ〱膏薬を足の裏へ踏付やァてきたねへ。ヘツ〱〱。痰を吐やう。瘡蓋を落さやう。ヘツ〱。イヤハヤ埒もねへ。ねへぞでおまん妙法蓮華経（トざくろ口のぞき）やおびさしハ尻ざ。アイ御免なさい。コレおめへがたハ悪いすさ口もとを塞て居るぞと中へ這入るせへ。ゐうう這入るがおまへね。ツレテマア甚だ腰を掛てむうり居ちや。アどうもおまへねへ。アイ老人でござい。

や是ハ能湯だ。此湯をぬるいと云人ハ鉄炮の方へ沈。
此格子をおろしで鑊の中へえいるが能やレくけつかう。
アゝんまりあつうわんげきまう〽清盛さまハ火の病であらう。
コラぢいさん。鉄炮へ沈むと附馬がくるせへのさ。おめへ熱かア。
香の物を一切入てうれじしれへ。アリヤ湧て来るぞ。こう
てれさア。虫の食さ穴へさして能塩梅だぜ。體中へ一粒
鹿の子の紋が付さ。虫ゆまんざうじやアねへ〽志のべより
くる小挑灯。伊吾よくよんでもみそさが。可愛よし松へ

ちれとねさザサ。おとうぽんとねさあうよしく〽たとゑ山
中三軒家でも主と二人でくらさとうくろ〽へゝ畜生め。ところ
りおざイ。さとぞりおちてくるや〽アづゝまイ。まごこヨいとい。
〽テコテン〳〵。とゝくてんくうぺんなん〽ヨイ志ぐれふしねへ。三味線が太ねへ
らア〽アイ御免ねへ〽ソリや出まさく。パアーまさだまをろゆうし
あさん〽大きな睾丸だぜへ。天窓と鉢合をして睾丸か
宙を飛行さア。とんだ人魂だ〽吉やおゝゐうう睾と
ゑれちやア合馬アあるめへ。尻から銀で褌をかけヤナ

「なさア能く。飛車とはぶれて角の通アござ。かさりアがれ

ヨイ出来た田舎者く▲（西国の方からちかごろ江戸へ出て銭湯の勝手をしらずきよろ/\とながめてみたり）（小だらひの水をあつくしてきたのを / そばにぶゆふつけてあるをみて）「是ア憚なる。湯も汲出て。手拭まで添出とへどうさゝるのもすゝんだへト（おのれが手ぬぐひへ水をかけて / あんじ/\なさる）

（ごんべひ / ろげなき）▲（さきほどのあかゝりむさきかみがうかんどしを / 湯の中にとうあげてらぬをあらひながら）此湯は臭白のさゝる湯らいア臭るく。是何ぐいどらしき物ぐい人ども遣ふと汲でも有りろ。此まア。油の浮さるすちうのさゑおへぎらぐさゝる。鯨ども洗ふさ汲どもの如あるけく奇妙な白ひ。

是ア其明るるト（湯をあびてはらひを / やうしの盥をあげてゆく）「その盥はちとくお持なさろうてくるいくるゝはあぺりおもとく出て小桶で汲で行てお明なさい「ナイ（ゆくゑの男は其素をあらふるとなにか湯を汲さうとする / くありろの男はさうじをうけてゆとの不ふぬち湯さ小桶を）（ゆをくんで来ちやうござりやす / かだらひの中へあけてつかふ）ハ手拭は新ぐろうとも。おすいは此捨ても彼一ぐい此不。穢居るう。ぎやくさんおらう如此よどれのまとさゝる事（ふのゆく）トわうころうんどしをひろげてみれば（あとさきふひもがついてみる）此叔後に細付くは此奴ども天窓さお被る時此紐ども。腮のあるうへかゝみ付るるう。是至極勘辨なき支だト（うのひもをうでくるく巻てふんどしを / まるめてかごの中をこまるるへ）

「（かくがくとりの風呂より出かゝらバ のそゞくときてうそくくるまへし）コリヤどうするぞい。才覚おひやして
置た下帯があるハ。まだ洗ハん物が失るといふハどうの
何ぼでもつんとんとひやうも有ハ。ト（かの西国りのがくは拭すくて顔を あらひゐるをみてさけぶ）「ナイく
ヤ。こりや滅相じや。夫おまへの手拭じやあるまいがの
此奴ども。此盥ふ突込で有けへ自己不持の手拭。爰さ
濯金くらバ「ヤ。そりや大変じや。テモマア。めつそうなる事さへる
人じやな。夫手拭じやるハ私が下帯じやないの褌で顔
あらふとハて。おれらしハ。狐ふ洗ゐまれさる。乱氣きつさのじや

あるハおまへソリヤ何様さんさのトやハ早うおどろして甚體
雪がんせ。勿体ないへ。ト（きのて西国の きやをつぶし）「道理で油ぎらつとるとお
かへさテ。今時分の時あると皆洗出らてのある不なへ。ヘツヘツ。
是是是臭かる男ハ出さとのさんだハのさんだハ。ト（ちも ちら）
の中へ下帯をあげさん（でふろの中へへる）「アヽヽヽ 自らもなんへ癡呆めじや。コリヤ
モウ私が洗ふさまりや。めつかう能ふとしさ事でめつけの
幸じやるハ。コリヤコレ。ふんどしさ事でめつそうの幸とかうる
いひさつてきびしへ口合なアヽヽ